いのはな Harmony ハーモニー
千葉大学病院ニュース　人間の尊厳と医療の調和をめざして
38
2014.7

新しい外来診療棟がOPEN！

ホスピタルストリートで笑顔を浮かべる研修医と看護師

千葉大学病院は設立140周年。
新しい外来診療棟のオープンを機に、
さらに高い志と情熱を持って、
地域医療を見据えた
世界水準の病院を目指します。

新しい外来診療棟は
千葉大学病院の象徴となる存在です。
設計のキーワードは、
「ガラス」と「木質材料」の調和。
2つを調和させることで、
医療の透明性と温かさを表現しました。

木のぬくもりを生かし、患者さんの居心地良さ、安心感を重視した内装。陽光が差し込み、開放感あふれるスペースで、患者さんの心を和らげたいという思いを込めています

建物内は、東側はグリーン、西側はオレンジと随所にエリアカラーを施し、患者さんをわかりやすくご案内します

災害や有事の際に備えて、1階の待合室と診察室に医療ガス設備を設置。酸素吸入などの処置も可能な治療スペースとなります

特　集

より高度な診療を、より快適に

新しい外来診療棟で始まる、

今回は、看護師の
山口陽子が
案内いたします

**新しい外来診療棟とともに
私たち医療スタッフが
患者さんに心を込めて
快適な受診環境をご提供します。**

1 抗がん薬点滴などを行う「通院治療室」を50床に増加

新しい外来診療棟 5F

抗がん薬点滴を受ける患者さんの治療を行う「通院治療室」とホルモン薬の注射を受ける患者さんのための治療室を、合わせて30床から50床に増やしました。専門･認定看護師、専門医師、専門薬剤師を含むスタッフが常駐し、患者さんの主治医と密接に連携をとっています。治療中は副作用対策のアドバイスも行っていますので、気軽にご相談ください。新しい外来診療棟の最上階に位置し、大きな窓から外の景色を眺めながら、ゆっくり安心して治療を受けられる空間となっています。

2 「糖尿病コンプリケーションセンター」を新設

新しい外来診療棟 3F

糖尿病の合併症に悩む患者さんが増加する中、主要診療科のコーディネートのもと、集約的に最先端の技術を用いて、合併症の管理と予防を行います。多くの協力診療科・診療部門が連携することで、より患者さんのための医療を発展させていきます。

糖尿病コンプリケーションセンター長
横手幸太郎（よこてこうたろう）

ニュース＆トピックス

NEWS & TOPICS

『千葉大学病院の薬膳ごはん』レシピ本、大好評発売中!

当院の和漢診療科長・並木隆雄診療教授が監修する、カンタンでおいしい薬膳レシピ本が出版されました。

院内にある展望レストラン「ヴァンセーヌ」で四季が変わるごとに提供されて人気の「医食同源メニュー」のほか、オリジナルのレシピも多数掲載。院内売店のほか、全国の書店で販売しています。

できるだけ入手しやすい食材を使った薬膳料理を紹介

「がんおしゃべりサロン」参加してみませんか

当院では、がん患者さんやご家族が、病気や治療のこと、悩みなどお互い自由に話し助け合う場「がんおしゃべりサロン」を毎月開催しています。参加者からは「気持ちが楽になった」との感想もあり、好評です。次回の日程や会場は、ホームページや院内のチラシをご覧ください。

お気軽にお立ち寄りください（申込不要、途中参加可）

中国から看護師の研修生を受け入れています

千葉大学と中国医科大学の友好を深め、お互いの学術研究や教育上の協力を促進するため、平成25年4月に大学間交流協定を締結。中国医科大学での日本語看護学科の創設などに向けて、現在研修生3名を受け入れており、今後さらに日中両国の国際化・技術交流を目指します。

左から斉（ちい）さん、史（し）さん、夏（しゃー）さん

お知らせ　おかげさまで新しい外来診療棟が無事完成しました。工事中、ご来院の皆様には多大なご不便をおかけしました。改めて、これまでのご協力に心より感謝申し上げます。

新しい挑戦

4Fには、緑化スペースも用意。ハーブや季節の花などが、見る人をなごませてくれます

4 「高齢者医療センター」を新設

新しい外来診療棟 1F

高齢者医療センター長
高林克日己（たかばやしかつひこ）

超高齢化で増加する高齢患者さんの身体機能・認知機能の低下に、総合的に対応するセンターです。複数の病気を抱える高齢の患者さんを、複数の医療職種や診療科が連携してQOL（生活の質）の維持を主眼とした診療にあたります。

3 「入退院センター」を新設

外来ホール棟 1F

入退院センター長
松原久裕（まつばらひさひろ）

入退院センターは今春より本格運用を開始。入院前から退院後まで、継続した診療・ケアを安心して受けられるよう、多職種が連携して、患者さんの思いと意向を尊重したサポートを行います。また、地域の医療機関などとも連携し、適切な医療を継続して受けることができるよう支援します。場所は外来ホール棟の1階となります。

5 「周術期管理センター」を新設

新しい外来診療棟 B1F

周術期管理センター長
磯野史朗（いそのしろう）

手術を受ける患者さんが、スムーズに安全安心な入院と手術が受けられるよう、医師と看護師とスタッフが連携し、入院前から術前管理を実践。先進外科治療が安全に行われるようサポートします。患者さんの不安を軽減するため、患者さんへの情報提供、インフォームドコンセントなどを行います。

患者さんのためのQ&A

Q 転倒予防のために、自宅でできることはありますか？

A 誰でも加齢とともに転びやすくなるものです。家の中でカーペットにつまずいたり、床から立ち上がる際にバランスを崩したり。筋力の低下と、注意力や判断力の低下、背骨の変形による姿勢の変化などが要因です。そこでまず、転倒危険度をチェックしてみましょう。

＜まず、自己チェック＞

①片脚立ちが30秒以上できるか？
（何かにすぐつかまることができる場所で）
②イス（40cm高）から、手を使わず、
反動もつけずに立ち上がることができるか？

予防には、柔軟性、筋力、バランスなどを複合的に取り入れた運動を行うことが有効です。筋力トレーニングでは「イスから立ち上がる運動」、バランス練習では「足踏み運動」「片足立ちの練習」などがあります。いずれも転倒するリスクを伴うので、付き添い、または本人が壁・テーブル・手すりなどにつかまって行うなどの注意が必要です。「やや疲れた」と感じるくらいを目安に、できるだけ毎日行うとよいでしょう。

＜自宅での転倒防止策＞

①スロープをつけて段差をなくす
②手すりをつける
③廊下などに足元灯を設置する
④風呂場に滑り止めマット、入浴用イスを置く
⑤動きやすいように家具の配置を工夫する

転倒リスクの軽減には、個々にあった具体的な対応が必要です。お困りの方は、リハビリテーションスタッフなど専門家のアドバイスを受けることをお勧めします。

リハビリテーション部　転倒転落予防対策チーム
理学療法士 阿部祐樹（あべゆうき）

お知らせ　各種診断書・証明書・療養費払いの証明・自賠責保険にかかる明細書などを交付する『診断書等受付交付窓口』が、新しい外来診療棟の1階に設置されました（料金は前払制）。

内部にひそむ患部を確実に捉えて治療しています

この数年、県内の大病院に導入され始めた「超音波内視鏡」。当院では世界に先駆けて1995年より臨床応用を開始し、開発にも携わってきました。普通の内視鏡との違いやメリットなど、担当医師がわかりやすく解説します。

光学医療診療部
副部長
露口利夫（つゆぐちとしお）

1984年、千葉大学医学部卒業後、千葉大学医学部附属病院消化器内科に入局し、2010年から現職。趣味はロードバイクで、週末には印旛沼まで往復約40kmを走行。仲間と九十九里や銚子までロングライドすることもある。

表面的にはわからない病変の深さ・範囲を捉える

内視鏡とは、先端にカメラレンズや鉗子（かんし）のついた挿入部を身体の中に入れ、身体の内側から診断・治療をする医療機器です。

その中で最新のものが、超音波機能を兼ね備えた「超音波内視鏡」。食道や胃、大腸、すい臓などの粘膜の下の、通常では見ることのできない内部にひそむ臓器の病変部位を確実に捉えることができ、内視鏡診断が格段に向上しました。ピンポイントに病変部位に穿刺針（せんししん）を刺し、すぐさま病理診断を行うことも。

当院では2013年度、約750件もの超音波内視鏡検査の実績があります。

患者さんの負担も少なく

当院では超音波内視鏡による診断だけではなく、内視鏡による先進的な手術治療を行っています。内視鏡手術には、患者さんにとって以下のようなメリットがあります。

①大きな傷をつけずにすむ
②消化管機能を温存できる
③入院日数も短縮される

開腹手術に比べて身体への負担が少ないので、入院日数も短くなります。とはいえ、病状によってリスクがゼロではありませんから、医師にご相談ください。

内視鏡による診断・治療は、病気の早期発見・早期治療ができるとあって、大きな期待が寄せられており、技術は進化し続けています。私たち医療スタッフも、引き続き技術の向上に取り組み、最善を尽くして患者さんの治療にあたってまいります。

内部を観察します

先端にカメラレンズや鉗子のついた挿入部（写真左）を身体の中に入れ、目的部位を観察。写真右の操作部でダイヤルを操作しながら検査

画像で診断します

超音波ビデオスコープの画像を内視鏡システムのモニターで確認して診断

切除や摘出もします

内視鏡の先端から穿刺針を出して、組織を採取

内視鏡診断・治療は、医師、看護師、組織・病理標本を確認する検査技師、機械のメンテナンスを行う光学技師など、4～5人が連携し行います。チームの総合的な力が要求される治療です

私のオフタイム　うさぎの「チーモ」に癒されています

毎日「チーモ」と遊んでいます

看護部（ひがし棟5階）
佐々木ちひろ

病棟看護師3年目。日々のケアや処置に追われ忙しい時間を送りながらも、一人ひとりの患者さんと向き合い、喜びや楽しみ、ときには悲しみを共有していく中で、看護師としての責任感と充実感を日増しに強くしています。

そんな私の癒しは、ペットのうさぎ「チーモ」です。大好きな牧草チモシーを食べる姿がとても愛らしいので名付けました。「チーモ」はうれしいときは首を振って飛び跳ねたり、撫でをねだったり、とても表情豊かで見ていて飽きません。特に、伸びをしながら寝そべる姿を見ると、その日の疲れは一瞬で消えてしまいます。

今日も、チーモからたくさんの元気と癒しをもらい、そのパワーを患者さんへ注いでいきたいと思います。

働く現場日記　患者さんとの交流が私たちのやりがいです

ボランティアスタッフ　早崎昭子

「なのはな文庫」は、職員や退院された患者さんから寄贈いただいた文庫、マンガ、絵本など約15,000冊をとりそろえた院内図書室です。18人のボランティアスタッフが交代で、貸出業務や本の整理・消毒・清掃にあたっています。

楽しみは、患者さんとの交流です。お会いするたびにお顔が明るくなり、元気になられていく様子がわかるので、私たちもうれしくなります。退院されるときにあいさつに来てくださったり、本にお礼のお手紙が入っていたりと、感激することもしばしばです。ぜひ皆さん、お気軽にご利用ください。

●貸出日：水曜日10:00～12:00
　　土曜日14:00～16:00
●場所：外来ホール棟地下1階（8月下旬移転予定）

あとがき

本号は、誌名が『いのはなHarmony（ハーモニー）』に変わり第2号になります。Harmonyの語源はギリシア語のharmoniaであり、元来、大工仕事で建材の各部を互いにかみ合わせて、ぴったり接合することを意味しているそうです。真っ青な空が広がる季節になったと同時に、新しい外来診療棟がついにオープンとなり、その外観にHarmonyを感じつつ、新しい千葉大学病院に期待している次第です。
（編集委員　呼吸器外科　吉田成利）

『いのはなハーモニー』38号　発行日　2014年7月20日
発 行　千葉大学医学部附属病院
〒260-8677 千葉県千葉市中央区亥鼻1-8-1
TEL　043-222-7171（代表）　http://www.ho.chiba-u.ac.jp/
※ホームページでバックナンバーがご覧いただけます